

数学教室の中庭の記憶

元事務職員 篠崎 由加里

私は、昭和61年（1986年）から平成9年（1997年）、そして平成16年（2004年）から令和2年（2020年）までの間、数学事務室で勤務させていただきました。

このたび、同窓会誌への寄稿のご依頼をいただき、長年心の奥にしまわれていた数学教室にまつわる記憶の中から、現在の中庭ができた経緯を記録として残すことにいたしました。とはいえ、年月の流れとともに記憶も随分薄れておりますので、誤りなどございましたら、ご指摘ください。

1. 就職当初の中庭とプレハブ

私が就職した昭和61年ごろ、数学教室の中庭には、約16坪のプレハブが東西にわたって建てられていました。これは修士学生の控室として使われており、東側が修士2年生、西側が修士1年生のスペースでした。

室内は整理整頓されているとは言えず、入室する際には「ノックしてから少し待つように」と先輩から教えられました。数秒の間に片付ける時間を確保するためだったのでしょう。それでも靴を脱いで入室するには少し勇気が必要な状態でした。

控室の中では、学生同士が仲良く協力し合い、研究に集中できる空間が自然と形成されていました。特に修士論文の提出時期には、夜通し研究する学生の姿が見られ、疲れた様子でプレハブから出てくる光景が、年末年始の風物詩のようでした。

当時はまだ用務員の宿直制度があり、当時用務員として勤務されていた澤見さんや北尾さんが、夜遅くまで残る学生たちを気遣っておられた姿が印象に残っています。用務員さんと学生が深夜まで話し込んだということも何度か聞きました。

2. プレハブの撤去

その後、耐震工事の影響もあり、修士学生の控室は3号館（北側の旧地球物理学教室部分）、1号館、4号館（宇宙物理学教室の4階）へと移転しました。

役目を終えたプレハブは、一時的に数学教室の倉庫として利用されていましたが、老朽化が進み、床が抜けたり扉の開閉が困難になったりするなどの問題が発生。そして最終的には消防法に抵触する恐れがあるとして、2010年に撤去が正式決定されました。



プレハブの屋根

3. 中庭再生に向けて

プレハブ撤去後の跡地利用をめぐることは、三輪哲二先生をリーダーとした臨時ワーキンググループが結成されました。メンバーは上先生、國府先生、用務員や事務職員を含む約10名で、幾度も協議が重ねられました。

また、研究員・学生・教員全員を対象としたアンケート調査が行われ、「どのような中庭が望ましいか」を問いました。予想を超える回答が寄せられ、皆さんの中庭への思いの強さを実感したのを覚えています。

その中でも特に重視された意見は：

- 一年を通じて花が咲いていること
- 憩いの場として利用できること
- 歩きながら考えられるような回廊式であること

でした。

4. 現在の中庭の植物たち

アンケートを踏まえ、ガーデンデザイナーの方が何度もデザイン案を描いてくださり、話し合いを重ねた結果、現在の回廊式の中庭が誕生しました。施工期間は約半年。構成員の希望をできる限り反映しつつ、予算や維持管理の点にも配慮がなされました。

中庭のシンボルツリーは^{けやき}欒とメタセコイア。特にメタセコイアは、40年以上前に澤見さんが苗を植えたという話も残っています。



プレハブ横の枝垂桜

四季折々の植物も中庭を彩ります：

- 春：さんしゅゆ、桃、枝垂桜、山桜
- 初夏：ハナミズキ、さつき、つつじ、紫蘭、アジサイ、オリーブ、ヤマボウシ
- 秋：紅葉が広がり、季節の移ろいを感じさせます
- 冬：椿、水仙、南天、木瓜が花を添え、鳥たちの姿も見られます

特筆すべきは、プレハブの脇でひっそり咲いていた枝垂桜（写真）が、撤去後に急成長し、今では中庭の存在感を大きく担うようになったことです。

また、中庭中央付近では故・齋藤裕先生のご遺族からご寄付をいただいた椿「初嵐」がつつまじやかに数学教室を見守ってくれています。

5. 中庭のある日常

中庭が完成してからは、おそらく数学を考えながら歩いていらっしゃる先生や、ベンチで読書する学生さんの姿が見られるようになりました。その光景を目にするたび、「考えることができる中庭」に近づけたことを嬉しく感じました。

中庭完成の年には、記念行事として餅つき大会も開催され、先生方や学生、職員とその家族が一堂に会しました。これは令和元年度（コロナ禍による中止）まで続けて行われました。また、春のお花見や夏のバーベキュー大会など、季節ごとのイベントも開かれ、中庭は憩いの場として多くの人に親しまれるようになりました。

6. 最後に

この中庭の美しさが今も保たれているのは、日々、用務員の方々が業務の合間を縫って、草抜きや水やりなどの手入れを続けてくださっているおかげです。暑さ寒さにかかわらず、愛情を込めて植物と向き合ってくださいの姿には、頭が下がる思いです。

同窓生の皆様、そして現役の教職員の皆様、数学教室の渡り廊下を通られる際には、ぜひ中庭の木々に目を向け、鳥の声に耳を傾けていただければ幸いです。



2025 年春の中庭

数学教室の建物の変遷 ——使った建物 全て現存——

1965 年学部卒 井川 満

0. はじめに

教室の出来事をその時々と同窓会誌に書きとめておく努力が必要だとは、折に触れて編集委員や世話人のあいだで話題になった。その例として、教室の「中庭整備」に関しても、整備完成后さしたる時間経過があったわけでもないのに、すでに整備に関わられた方々の記憶が薄れかけているようである。

そこで「中庭整備」を是非記事にしようということで、この中庭整備に終始数学教室事務職員として深くかかわられた篠崎由加里さんに執筆をお願いすることになった。篠崎さんも兼ねがね必要を感じておられたので、多忙にも関わらず文章をお書き下さった。

さて執筆をお願いした者として、篠崎さんの執筆のご労苦にわずかながらもお手伝いと思わずにはおられなかった。篠崎さんの記事冒頭に出てくるプレハブ建物について調べよう、と思ったのがこの拙文を書く切っ掛けである。松本和一郎さんが会誌連載記事の中でプレハブに触れられているので、まず松本さんに話を伺うこと、ついでプレハブの写真を探し出すこと、これが出発点であった。

松本さんに話を伺い、ついで図書室に保管されている昔の写真のファイルを繰っているうちに、段々と数学教室の建物の歴史に興味を覚えてきた。

“京都大学百年史”や“京都大学七十年史”の頁をバラバラと繰っていて、日本第二番目の大学が京都に設置された経緯をはじめ知り、大変興味深かった。それに関連して大学が出来る前の地図などを眺めて、第三高等学校そして京都大学が設置される以前の吉田村や白川村の人々の昔の生活に思いを馳せることも結構楽しかった。そのような雑々とした事柄をかき集めたのがこの拙文であり、まさに出来の悪いレポートである。お読み下さる方々の寛恕をお願いする。

数学教室は京都大学発足時より存在し続けてきた教室で、最も長い歴史を持つ教室の一つであることは、以前から意識していた。今回の学びを通して知ったのは、それに加えて“数学教室は、その教室が住んできた建物のすべてが現存している京都大学唯一の教室である”ということである。これは私の驚きであり、また私が誇らしく思うことである。

1. 第三高等学校の京都移転

1.1 第三高等学校の京都招致 明治維新後、維新政府は欧米に追い付くことを大切な課題としたが、そのために重要だったのは教育制度の整備であった。教育制度のなかでも、高等教育の頂点となる近代的（西欧的？）大学として、東京大学が1877（明治10）年に設置された。この東京大学開設に至る道筋も言うまでもなく紆余曲折を経ている。

さらに文部省は、1886（明治19）年高等教育のさらなる充実のため、全国を5つの区域に分け、各区域に高等学校を、大学での学習に必要な教育課程を施す機関として設けることを決めた。京阪神は第三区域に入っていた。

京阪神地域での、洋学教育の代表的機関として舎密局があった。舎密局はまず1869（明治2）年に大阪で、その翌年に京都で活動が始まった。しかし、京都の舎密局は、1886（明治19）年時点では既に活動を停止してしまっていた。京阪神地区における近代西洋的教育組織は、医学は言うに及ばずほとんどが大阪に集中していた。それゆえ、第三区域の高等中学校、即ち第三高等中学校は、なお活動していた舎密局などを核にして大阪に作られた。このとき誕生した第三高等中学校の敷地は、近代的教育を充実させていくにはあまりに狭かった。文部省が構想している高等中学校を実現するには、より広い敷地を求め、建物を始めとする諸施設を作り直さねばならなかった。それ故、第三高等中学校はとにかくより広い敷地に移転しなければならず、その移転先が探されていた。

その後、明治政府は大学をもう一つ作る必要を感じた。そのため、第三高等中学校をより広い敷地で、設備などもより充実したものに作り変え、やがてその敷地・施設を基として日本での第2番目の大学設置構想がたてられた。その構想に沿って、第三高等中学校の敷地探しがなされることになった。

第三高等中学校招致を熱心に働きかけたのは、京都府知事北垣国道であった。この北垣は、維新後、天皇が東京へ行ってしまった故に、すっかり衰退してしまった京都の町の回復に情熱を傾け、具体策の一つとして琵琶湖疏水実現に力を注いだ。

彼は、工部大学最初の卒業生である田辺朔郎を見出し、田辺を工事責任者に据えて琵琶湖から京都に水を引く計画に着手し、みごと実現させたのである。

当時の日本には未だ西洋近代的土木工法は育ってなかった。この琵琶湖疏水工事は日本人の手による西洋近代工法による最初の大工事であった。田辺の指導の下に幾多の困難を乗り越えてやり遂げられたが、これは西洋的近代土木工法の実践であったとともに、日本土木界への教育でもあった。

田辺は琵琶湖疏水計画を見事完成させ、京都近代化の礎をつくった（琵琶湖疏水は1885（明治18）年着工、1890（明治23）年第一疏水完成）。

この琵琶湖疏水工事進行中に、北垣は第三高等中学校の京都招致にも熱心に取り組んだのである。学校の開設費用の相当部分を京都府が負担するとの申し出も行い、京都招致を実現した（百年史によると、総工費16万2500円の内、京都府が10万円を寄付すると申し出た由。大阪府は第三高等中学校を大阪に残留させようとの熱意はなかったようである。京都招致の理由にかんしては、百年史と百二十五年史では記述の趣がやや異なる点がある）。

第三高等中学校の京都招致が1886（明治19）年11月に決定した。さらに文部省は第2番目の大学開設計画を定め、第三高等中学校用として京都に定めた敷地や新に作る施設を、やがて大学の施設として使うことを視野においての新第三高等中学校の建設計画が練られた。建設場所の候補がいくつかあったが、文部大臣森有礼が自ら実地検分し、水の便に優れている吉田の地を選んだ。

1.2 選ばれた場所は尾張藩屋敷跡 森有礼が第三高等中学校の移転先として選んだのは吉田の地であったが、その敷地は尾張藩邸跡地を中心とするものであった。

東京大学本郷構内は加賀藩邸跡だということは、私はずっと以前から何となく知っていた気がする。東大本郷構内のシンボルのひとつである“赤門”は、将軍家から加賀藩

前田家へのお興入れに際して建てられたもの、ということも何時とはなしに知っていた気がする。また夏目漱石の小説“三四郎”に由来するといわれる“三四郎の池”も、東大に用事があった時に巡りながら、これも加賀藩邸跡の徴の一つと思ったことであった。

しかし京都大学に学びながら大学が出来る前は、例えば本部構内は一体どんな場所だったのかなどとは考えたことは正直なかった。司馬遼太郎の“竜馬がいく”で土佐藩陸援隊の部分を読んだとき、陸援隊が置かれた場所は京大北部構内の辺りなのかとぼんやりと考えたことがあった。

これに関し、私の在職中の2000年位であったか、理学研究科2号館建設に先立って遺跡調査が行われた。その報告書の中に、地表近くに旧土佐藩邸の基礎部分跡が確認されたことが報告されていて、“竜馬がいく”の陸援隊のところから考えたことが正しかったのかと思ったことであった。

今回、京都大学七十年史と百年史を紐解いて最初に驚いたことは、本部構内はかつて尾張藩邸であったことである。実際はやや縦に長かった尾張藩邸跡の東側境界を可能な限り東に向けて広げたものである。今度は横に長くなった敷地が第三高等学校移転用地となり、その後京都大学本部構内となったのである。

京都大学は、徳川御三家最高家格の尾張藩邸跡地であったかと驚きもし、“尾張藩は、石高においては加賀百万石に及ばずとも、家格は遥かに上であるぞ！”などと思つたらぬことを考えたりした。

1868（明治元）年制作“大成京細見絵図”の一部を載せる。

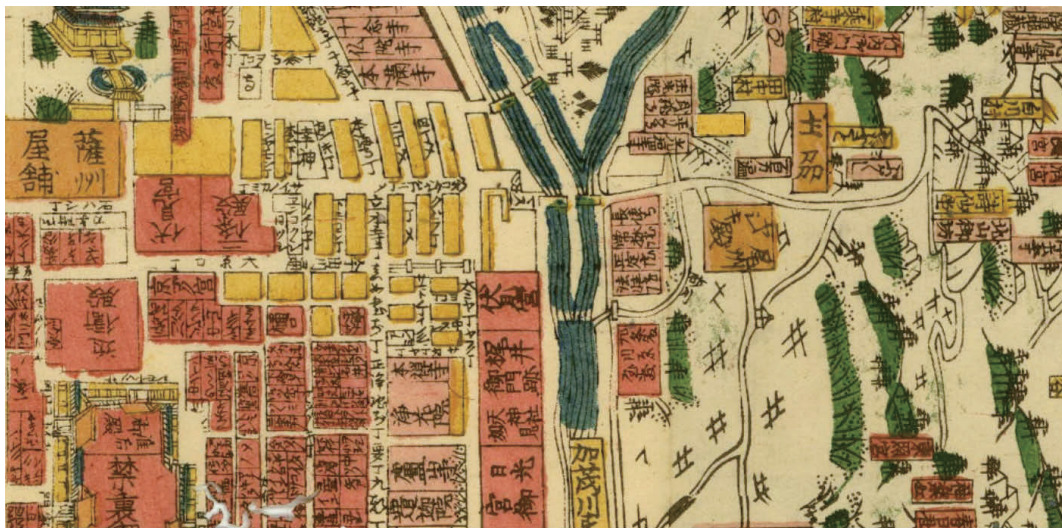


図 1.1 大成京細見絵図（部分）

上の絵図には百万遍の東側に“土州”と書かれており、百万遍の南側に“尾州殿ヤシキ”があると描かれている。

さて、東京本郷の加賀藩邸は、大阪夏の陣後間なしに、すなわち江戸時代がまさに始まるときに徳川幕府より与えられた土地であり、かつ加賀藩の上屋敷であった。

他方、京都の尾張藩邸は江戸幕府終焉直前に作られたものであった。1853（嘉永6）年、ペリー来航によってにわかに京都朝廷の意向が重大な政治力を持つようになった。それまではどの藩も禁裏御所のある京都には儀礼祭典のため、また伝統文化の物品購入程度の役割を担った小さな藩邸しか持っていなかった。しかし、朝廷を巡る政治交

渉が重要になってくるにつけ、その交渉には軍事力の後ろ盾が不可欠となってきたのであろう。交渉に関わった雄藩が競って京都に面積の広い藩邸を作って兵を駐屯させたのである。

図 1.1 は絵図の一部であるが、この絵図全体を見ると、黒谷の辺りから聖護院の南の方に、彦根、会津、越前、薩州、加州、阿州などの藩邸が描かれている。ところが 1862 年制作とされている“文久改正新選京絵図”には今触れたような藩邸は一つも描かれていない。

このことは、いわゆる雄藩が情勢の変化に応じて急遽京都に大きな藩邸を構えて、それぞれの軍隊を駐留させたことが分かる。

1869（明治 2）年の版籍奉還によって江戸末期に各藩が京都に作った藩邸の土地・建物は明治政府の持ち物となったのであるから、その跡地に教育施設などを作るのは易しかったのであろう。百二十五年史によると、尾張藩邸跡は明治になってから元の畑地になっていたそうである。

1.3 第三高等学校の建設 明治維新後、教育制度をどうするかは明治政府の重大課題であり、他方まさに手探り状態であるのは避けられず、改変が度々行われたのは止むを得ないことである。やがて、高等学校が高等学校と呼ばれるようになるが、言葉の煩雑を避けるためにこれからは第三高等学校と一足飛びに呼ぶことにする。



図 1.2 明治京都地図（1897 年発行）部分

上の地図は、1897（明治 30）年発行の地図である（製作者は書かれていない）。次頁の図 1.3 と比べると、この地図では第三高等学校敷地内に描かれている建物は開設時の全てではないので、地図発行時よりも大分前の状態のようである。

ではあるが、既に熊野神社から東一条まで真直ぐな道路があり、第三高等学校を中心に都市整備がなされつつあったのかと推察されるが、現在京都大学敷地となっている場所はどこも畑地であったことが分かる。

下の図は百年史に掲載の第三高等学校の施設配置図である。この図からは、中心に本校、ときに本館とも呼ばれている、が置かれ、その右左に物理学実験場と化学実験

場が配置されている。いずれも赤煉瓦造りでデザインも統一されている。設計は山口半六と久留正道によるとのことである。

1886年11月に京都移転が決定されたのち、新第三高等学校施設の建設が始められていた。新設第三高等学校の開校は1889（明治22）年であった。百年史には、発足当時の建物の写真が載せられているので、そこから転載させていただく。

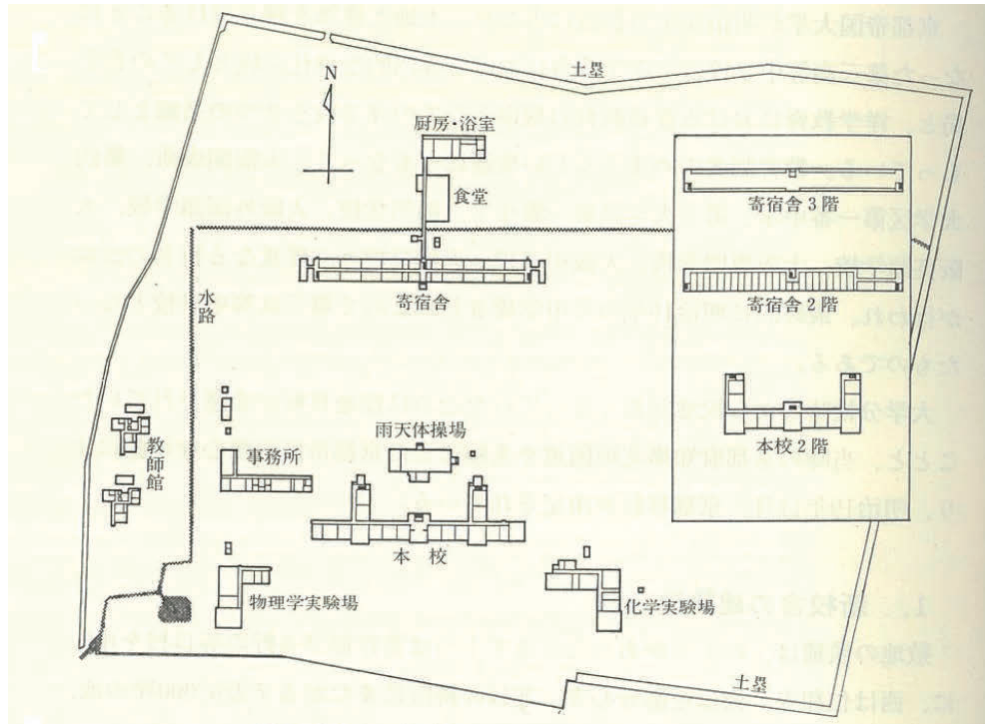


図 1.3 第三高等学校施設配置図（百年史 p.802）



図 1.4 第三高等学校本校（百年史 p.804）



図 1.5 物理学実験場（百年史 p.804）

赤煉瓦で建てられた西洋風近代建築物は当時の京都の人々にどのように映ったのであろうか。琵琶湖疏水建設工事初期には、赤煉瓦は英国から輸入されており、日本では珍しい建築材料であった。やがて山科に煉瓦工場が建てられ国産の煉瓦が出現したそうである。京の人々は、とにかく時代が急激に変わりつつあること、加えて明治政府の教育に賭ける並々ならぬ意気込みを感じたのではなかろうか。



図 1.6 物理学実験場東面（図 1.5 の左半分）



図 1.7 左写真の建物の南面

上の写真は、物理学実験場の現在の姿である。外観は建設当時と殆ど変わっていないと思う。また、この建物が第三高等学校が京都に移転するに際して建てられた建物の中で現存する唯一のものである。したがって、京都大学に現存する建物のうちで最も古いものであると同時に、130 余年前の三高の雰囲気伝えるものと言われている。

2. 京都大学の発足

第三高等学校の京都移転は、これを足がかりにして日本での 2 つめの大学を創設する計画と関連していたことを述べた。京都大学は 1897（明治 30）年に理工科大学として第三高等学校の敷地と施設とを引継ぎ、拡充して始まった。敷地と施設を京都大学に譲った第三高等学校は、元の敷地の南側、二本松町に移った。

京都大学開学時の数学講座は 2 つであった。“数学科”なる呼び方は、ある時は制度の中に位置づけられたものであったり、そうではなく単なる習慣的呼び方であったりと、制度の変化に伴って変遷しているが、とにかく数学科、数学教室は京都大学発足時から存在し、現在まで続いている。

数学教室は、第三高等学校の物理実験場を出発点として、何度も増築を行った建物に、物理学教室と一緒に住んでいた。この建物は理学部数学科、物理学科が北部構内に移転した後も石油化学工学科などが使用し、現在は学生部が使っている。

右の写真は、現在の学生部案内板の一部である。私がそれに区分の線をいれて、部分に番号を振った。とにかくこの案内板を見れば、数学科と物理学科が用いていた建物は、いささか複雑な形であるのが分かるかと思う。このような複雑な形の建物は、必要が生じる毎に継ぎ足し継ぎ足しした結果であることが推測される。他方、建物それぞれの部分は、作られた時の姿をそのまま残していて興味深い。

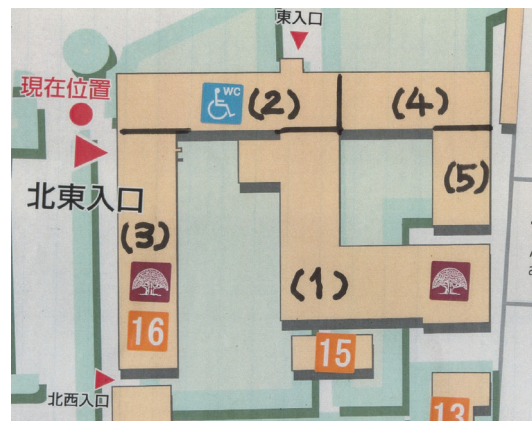


図 2.1 学生部案内板

- L 字形の (1) の部分は 1889 年、三高発足時の物理学実験場。

- (2) (3) の部分は、1898（明治 31）年までに平屋で増築された部分。
- (4) (5) の部分は、1909（明治 42）年までに平屋で増築された部分。
- 1914（大正 3）年、東面すなわち (2) (4) の部分に 2 階が作られた。
- 1922（大正 11）年、北面 (3) の部分に 2 階が作られた。

このように 30 余年間に亘って建物が延ばされ、また一階部分に 2 階を乗せるなどの増改築が繰り返されて現在の建物となったようである。大正期に増改築が終わった後は、外観は殆ど変化していないと思われる。現在の姿を下に載せておこう。

写真を見ればすぐに気付くが、一階部分の煉瓦の色と、2 階部分の煉瓦の色が明らかに違う。これから一階が建てられた時と、2 階が乗せられた時が違うことを示している。しかし色の違いは違和感を与えず、むしろ建物が単調になるのを防いでいるようにも感じる。



図 2.2 (2)、(4) 部分の東側壁面



図 2.3 (3) 部分の北側壁面

数学教室が使用していたスペースは、図 2.3 に映っている (3) の 2 階部分を中心に広がっていたようである。図 2.1 の案内板に北東入口と印が付けられている入口から 2 階に上ってゆく階段と 2 階部分廊下の現在の姿を載せておく。



図 2.4 階段



図 2.5 2 階廊下

京都大学が始まって以来、数学教室と物理学教室は一つの建物に住んできた。それは単に両教室が同じ建物を使っていたというだけでなく、教育や研究において交流があったのは当然である。

「湯川秀樹・朝永振一郎——生誕百年記念展——（2006年）」のパンフレットの朝永の大学時代についての文章には、2つの教室が一緒に住んでいた意義を垣間見させることが書かれている。少々長くなるがその部分を省略せずに紹介する。

湯川とともに京都大学理学部物理学科に入学。研究者の情熱に感じて入ったはずの大学だったが、実験室は薄汚く、古めかしい器械で古くさい実験を細々とやっている。理論の講義は、無味乾燥な数式の氾濫。

あんなに神秘的に思われた相対性理論も、講義をきくと物理的な肉づけも哲学的な考察もない。

この退屈な教室にも、新鮮な空気の漂う時間があつた。岡潔先生と秋月康夫先生の「数学演習」の時間である。何日も考え続けて問題がようやく解けたときの喜びは、創造の喜びに近い。

この2人の数学者は、ときどき御自身の研究の話もする。若い先生というものは、学生に分からせるといよりも、自分の興味に溺れるところがあるものだ。これは生意気な学生にはたまらない魅力だった。

3年生になって、卒業研究に量子力学を選び、湯川とともに玉城先生に指導を願ひでた。先生は「量子力学など指導できないが、やりたければおやりなさい」と。

量子力学の論文を読むのは大変だった。物理でびっくりして、数学でびっくりして二重にびっくり。このときの深い勉強が後に生きることになる。

東京でも若い連中が自分たちで論文を勉強しあい『物理学文献抄』にまとめていた。大学の教授たちは新しいものにはとっつきにくかったようだが……。

1928年、ゾンマーフェルトが京大にきて波動力学の講義をした。

3. 理学部の北部構内移転

京都大学の拡充・発展につれて本部構内だけでは敷地がやがて足らなくなるのが、遅い早いとは別として当然のことであつた。その問題に対処するために理学部が本部構内から出るとの方針で、1917（大正6）年に現在理学部が占めている北部構内の土地が購入された。土佐藩屋敷の跡地だったのでなかろうか。

1919（大正8）年に生物学科が新設され、この学科の建物が1920（大正9）年に北部構内に建てられた。1921（大正10）年に生物学科は、動物学科と植物学科に分離する。そのあと新設された地質鉱物学科の建物も北部構内につくられた。これらは断るまでもなく、学科の新設に伴い必要な施設を北部構内に建築したものであり、本部構内からの移転ではない。

3.1 市電の熊野神社から百万遍への延伸 教室の歴史が京都大学発足時より始まる数学科、物理学科、化学科の各教室は、北部構内への移転を既定路線として承認はし

ていても、何時移転するかとなると、特に大きな機械を使う実験系にとっては簡単なことではなく、決心し難いところがあったのではなかろうか。

その移転計画遂行に拍車をかける事態が生じた。京都市電は、大正の初めころまでには既に東大路を熊野神社まで北上して、そこから丸太町通りを西進する路線を運用していた。その市電が、熊野神社から百万遍まで延伸されることになった。1928（昭和3）年から東大路を、すなわち本部構内の西境を市電が走るようになった。

いざ市電が走行すると、市電がもたらす振動、土地を伝わる振動や空中を伝わる電氣的振動などであろう、物理実験の計器が狂いだし精密な実験が出来なくなってしまう。そこで物理学科の実験系の人たちは急いで北部構内に実験施設を移さざるを得なくなった。

これが切っ掛けとなって、本部構内にあった理学部施設の北部構内への移転が進んでいったようである。

書かずもがなの話（背に腹は代えられず） 京大物理学科移転のエピソードを綴っていると、書いておきたい話を思い出した。

私は大阪大学に1967（昭和42）年から30年余勤務した。私が大阪大学に採用された時には大阪大学理学部全体は豊中構内にあった。すなわち大阪のど真中にある中ノ島構内からの移転は終えていた。そのころ何度となく聞かされた話は次のようなものである：

大阪大学理学部の中ノ島構内から豊中構内への移転は既定路線ではあったが、大阪市のまさに中心部から大阪市を出て北部の豊中市への移転は、学生や教職員それぞれに様々な不便を生じさせてしまう。個人の便・不便とは別に、大きな実験器具を移せば実験再開までの手間と時間は並大抵ではない。あれやこれやで、既定路線とはいえ何時移るかの決心は中々つかなかったそうである。

1961（昭和36）年、第二室戸台風と名付けられることとなった特大台風が、室戸岬に上陸して四国を斜めに進んでから瀬戸内海に出た。そのあと大阪に再上陸し、さらに京都の真上を通過して若狭湾への進路をとった。

大阪では、中心部の中ノ島を囲む川が大氾濫した。中ノ島に有った阪大理学部も水浸しになった。物理学科自慢のサイクロトロンは地下室に設置されておったが、その地下室は泥水で満たされた。理学部の学生・教職員が呼び出されて地下室に溜まった水をバケツリレーで汲みだしたという。勿論サイクロトロンは全く使えないものになってしまった。

その後、即座に豊中構内への移転が決まり、大急ぎで実行されたとの事。

3.2 室戸台風と数学教室の移転 北部構内に新しく建設される数学教室の第一期工事は1934（昭和9）年に終了。その時の建物は下の写真の通りである。南面の1、2階には窓が8つ作られている。

百年史によれば、この建物の設計者は大倉三郎とのことである。

第2期工事は1936（昭和11）年に終わっている。これで窓の数は14となった。

七十年史436頁に次のことが記されている

昭和9（1934）年9月の室戸台風は、京都に大きな爪痕をのこした。本学も少なからざる損害を受けたが、幸いにも、新築工事が進行中の数学教室の建物は、無事であった。そして11月に完成し、数学教室は創設時代から住みなれた赤煉瓦の建物に別れをつけて、北部構内に移った。

また京都帝国大学新聞 1934（昭和9）年9月21日号、この日付は奇しくも室戸台風が京都を襲った日であるのでこの記事が印刷されたときには未だ室戸台風は来ていなかった、には新しく北部構内に建てられた数学教室の写真入りで数学教室の移転についての記事が掲載されている（新聞に載せられている写真は下とは別のものである。この新聞は京大文書館で教えていただいた）。

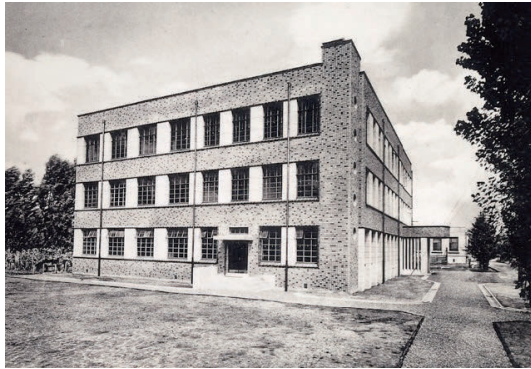


図 3.1 新築数学教室南面（1934 年）

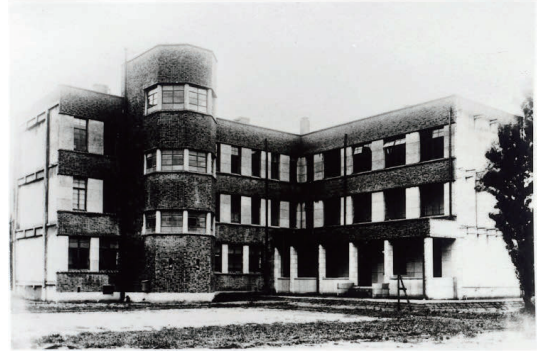


図 3.2 新築数学教室（図 3.1 の反対側）

（3 段の見出し）

「数学教室の移転は

10 月中旬か

明るいモダンな建物へ」

（記事本文）既報の如く柔剣道道場付近に建築中であった理学部数学教室は内部の設備を残して殆ど完成した。事務室になるところを模様変で教室にするのだから凡そ教室らしくもない外装を具えた窓の大きな明るい建物で工費三萬五千円、延べ六五九平方米¹の三階建て、十月の運動週間頃に移転が行はれるというから、暗い十八世紀の赤煉瓦の教室から解放されるのも間もないことだ。完成移転の暁には地球、宇宙両物理学教室を除いてここに理学部の大部分が集合することになるわけだ。

室戸台風と数学教室の北部構内への移転にかんして、私は大学院生の頃、溝畑茂先生より次のような話を聞いたことがある。

室戸台風で当時の数学教室は甚大な被害を受けた。どのようにして行かれたのかは聞いていないが、園先生がすぐさま東京へおもむき文部省を訪ねて、室戸台風による数学教室の被害が甚大であることを訴えた。園先生が文部省へ行かれたときは、未だ関西との通信が絶たれたままであった。しかし、先生が交渉を重ねている間に徐々に台風による関西の被害状況が東京にも伝わり出した。とにかく関西では物凄い被害が出ていることが分かり出した。

このように園先生が困難をおして東京までこられて語られる被害を考えれば、移転をせざるを得まいとのことになった。

¹この数字は“延べ”ではなく、“建坪”の間違いではないと思われる

上記した室戸台風と数学教室移転に関わる3つの話は、多くを教えてくださいますが私の頭に全てが矛盾なく収まる訳ではない。特に私が溝畑先生から伺った話には、当時の私の勝手な思い込みが多量に入っていることだろう。

現在私は、溝畑先生から伺った話は、

- (1) そのとき数学教室が住んでいた本部構内の建物も甚大な被害を受けて、早急な対応をせねばならなかった。
- (2) 北部構内に新しい建物の建設は進んでいたが、予め予定していたスケジュールに従ったのでは研究・教育に長期間の穴が開いてしまい、教育機関として許されない事である。
- (3) 当初のスケジュールを変更して移転をするには、予定外の様々の手続きが要り、新たな費用も掛かる等の難しい課題が沢山あり、大学の事務官を通じて文部省と折衝するのでは時間と手間が掛かりすぎる。悠長にやるわけには行かない。

といった事柄を示しているのではないかと推察する。園先生の教室を負う者としての厳しさを思うことである。

3.3 北部構内の整備の進展 理学部に生物学科が新設され、ほどなく動物学科と植物学科に分かれた。そして夫々の教室は北部構内に施設を作ったことは既に述べたが、これらの施設も室戸台風で甚大な被害を受け、修復して使用するのも難しかったのであろう。さらには将来計画として構想されてもいたであろうが、両教室のために新しく建物が作られた。外観は現在の数学教室（3号館）と殆ど同じであった。

今出川通りから理学部に入ると、まず事務室、ついで動・植物教室、さらにむこうに殆ど同じ姿の数学教室、この頃は数学教室の建物は南半分ではあった、そして宇宙物理学教室があった。

3.4 戦争中に地下室急造 70年史449頁に以下の記述がある：

この学科（数学科を指す）は歴史が古いので、文献は豊富で、また数学史的にみて貴重な図書が甚だ多い。それを保護するために、地下室を急造して、書棚をそこへ移した。戦局がわが国にとって不利になるにつれて、食糧の配給量もきわめて不十分なものとなった。

この急造の地下室の痕跡はどこかにあるのだろうか。現在に比べて書籍量は少なかったと言え、図書を全て収容する地下室を作るのはさぞかし大変であったろうと思う。

図書の地下室への疎開は、日本本土が爆撃される程に戦局が悪化していることを示しているが、それに続けて食糧不足だったことが述べられている。少々奇異な感を受けるかもしれないが、それだけ食糧不足は深刻で、学生や教職員の日々を苦しめていたことが窺われる。

次節で、中庭が野菜畑になっていたことに触れるが、その理由がこの記述からも理解されうるかと思う。

4. 中庭の出現

4.1 楠先生の絵 次頁の左のスケッチは、1948年頃に故楠幸男教授が学生時代に描かれたものである。

この絵を絵葉書にしたときの先生の説明文は以下のとおりである。

この絵は昭和 23（1948）年頃、理学部数学教室の 1 階廊下（現 110 講演室前）から当時の宇宙物理学教室をメインに描いたものである。後方の山は松ヶ崎方面（五山送り火での「法」の山）。前方の空地は戦後極度の食料不足のためイモや野菜畑と化した名残りで荒れたままであった。

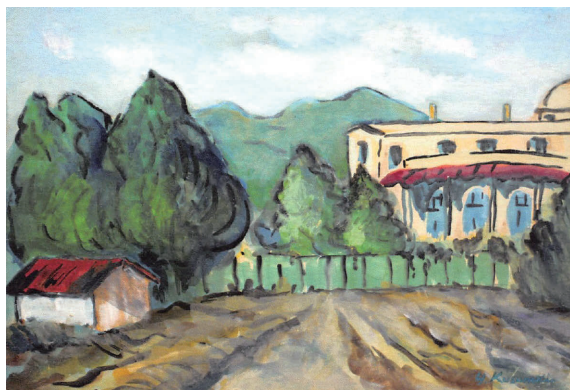


図 4.1 数学教室廊下からの景色

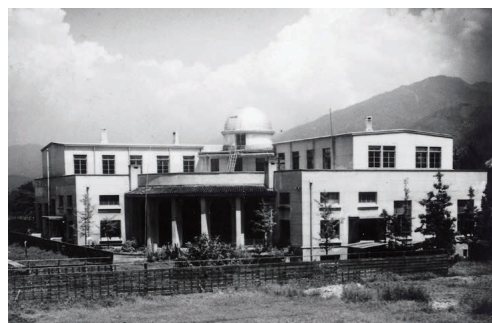


図 4.2 宇宙物理学教室（南西方向より）

若い人たちには、楠先生の説明文は理解しにくいところもあるだろうと思う。不十分ながらも私が知っているところを記して理解の助けとなれればと願っている。

現在の理学部 3 号館の南ウイングの外壁がタイルで覆われている部分、この部分を旧館と呼ぼう、は先に説明した通り 1936（昭和 11）年に完成している。現在数学の北ウイングとなっている部分は、地球物理学教室の建物として 1958（昭和 33）年に建てられたものである。したがって建物として 1934 年からの 20 年余りの期間、現在の南ウイング旧館だけが独立した建物として存在していたのである。従って数学教室 1 階廊下から北側を望むと、現在の 4 号館の位置にあった宇宙物理学教室の旧建物全体が見えたのである。

宇宙物理学教室の旧建物は、もともと 1925（大正 14）年に柔剣道場として建てられたものである。柔剣道場は少々変わったスタイルの建物で、左右対称、かつ表側と裏側とが殆ど同じ姿であった。本部構内にあった宇宙物理学教室を北部構内へ移すに際して、この柔剣道場を改造して用いることになった。

中心部の屋上に天体望遠鏡用ドームを設置し、左右の屋上に部屋を乗せることで対応した。1939（昭和 14）年に移転している。

このやや特異な宇宙物理学教室の建物は 1980（昭和 55）年に、旧建物を全て取り払って新しく 4 号館が建設されるまで存在していた。

楠先生の絵に描かれている建物は、宇宙物理学教室の裏側である（右側の写真）。

先に少しばかり触れたが、“畑の名残”なることも序でに述べておこう。

太平洋戦争中から戦後にかけて、日本中が極度の食料不足に陥った。その頃、耕せるところは全て耕して、イモやカボチャなどを植えて食料不足を補おうとした。

現在の中庭や北ウイングとなる場所、そして更に北の 4 号館までの場所を、用務員さんたちが畑にしてイモなどを植えたようである。図らずも楠先生の絵は、大学の構

内すら、空いた場所があればそこを耕して、野菜を植え育てた苦難の時代の一つの記録となっている。

4.2 北ウイングの建設と中庭の出現 先にも記したように北ウイングは1958（昭和33）年に建てられた。本来ならばもっと早い時期に地球物理教室として作られて、コの字型の建物となっていたのであろう。中国大陸での戦争が泥沼化し、更にはアメリカを相手に戦った太平洋戦争で勉学中の学生まで戦場に送られる時代に、大学の建物の新築などは不可能であったのは当然である。

敗戦後10年余を経てやっとコの字型の建物が出来上がったのである。しかし、溝畑先生から私が聞いたところでは、外観は旧館と同じであっても、中身は旧館に比べて粗末であるとのことであった（建物にもその時代が映し出されており、証言者として建てられた時代を後代に語り伝えるのである）。さらにコの字型の建物の西側に少し離れて工作室が建てられた（図5.1参照）。そのため、コの字型の建物に挟まれたスペースは、四方面を囲まれた、文字通りの中庭となったのである。

この写真は1963（昭和38）年3月の卒業生が作成して教室に残しておいたアルバムに収められていた中庭の写真である。何本かの樹木が植えられているが、どの木も小さい。左端の木は、現在大木になっている桜であろうか。この時から60余年が経っているが、樹木は見事に成長している。



図 4.3 中庭（1963 年頃）

5. 中庭のプレハブについて

「0. はじめに」で述べたようにこの拙文は、篠崎さんが記事のなかで大学院生用のプレハブに触れられていたことに触発されて書き始めたものである。やっと出発点に至った訳である。

5.1 老朽化したプレハブ 私が京大に異動してきたのは1990年代後半であったが、その時の中庭にはプレハブ建物があった（この記事の後ろを見てもらえば分かるよう

に、私がみたプレハブは2代目であり、しかも既に相当老朽化していた。それでもなお大学院生用控え室であったとの印象がある)。

この2代目プレハブに関しては、私には忘れられない思い出があるので記すのをお許しいただきたい。

それは、故加藤重樹氏が彼の一回目の理学研究科長をやられていたとき(2001年位だったろうか)かと思うが、彼と雑談していたとき「数学のプレハブは見苦しくなっている、撤去して中庭の整備を考えねばならない」旨のことを言われたことがあった。たしかにプレハブは相当見苦しくなっていた。

2006年春より3号館の耐震補強工事が始まった(私はこのとき定年退職した)。理学研究科の建物すべての耐震化終了後の各教室へのスペースの割り振りに関しては、この難しい作業をやり遂げうるのは加藤重樹氏以外にいないとの理学部首脳陣の一致した意見により、加藤氏は例外的に理学研究科長に再度任じられることとなった。当時は理学研究科長の再任はしないのが習慣となっていて守られてきていたのであるが。加藤氏は2回目の研究科長の任期中、癌が見つかったが職務を優先された故であろうか任期を終えて間なく逝去された。私にとっては、プレハブとは切り離しがたい思い出である。

かつて加藤氏が話されたとおり中庭のプレハブは撤去され、篠崎さんが記されているように整備して庭園にする計画が始まった。

5.2 初代プレハブ建設の経過 そもそもプレハブは何のために、何時建てられたか。今回篠崎さんから教えられていささかびっくりしたのであるが、プレハブ建物は“備品”なのだそうである。机や椅子、あるいはパソコンと云ったものの仲間扱いなのである。

プレハブの設置に関して、同窓会誌3号(2019年)に松本和一郎氏の記述がある：

留年生のために数学教室(今の3号館)の中庭にプレハブの建物が建てられた。よく覚えていないが、8畳か10畳ほどの部屋に幾つかの机・椅子と長机が2つ、それにダイキンの極めて強力な空冷式冷房機が付いていた。

そこで2025年2月に重川氏とともに、松本氏にプレハブに関連することを訊いた。以下に松本氏から教えられたことを書いておく。

5.2.1 松本氏の話 理学部数学科のストライキは1970年12月に解除された。数学科の定員は100名であったが、実際には約110名が在籍していた。1971年2月に大学院入試が実施され、約10名が合格して大学院に進学した。進学者以外に約50名が卒業した。それ以外の者のうち約40名が留年することとなった。



図 5.1 初代プレハブ

1971 年度になれば、70 年度の 3 回生は 4 回生になる。そこに約 40 名の留年生が加わると様々の面で無理が生じる。その対策の一つとして、1971 年度の早い時期に中庭にプレハブが建てられた。その建物の概略は、記事の通りであるが、建設の目的は留年生への環境を整えることであった。これを**初代プレハブ**と呼ぶことにする。

上の写真の後側右の方の自動車が止まっている向こうにあるのが工作室である。言うまでもなく左側の建物は数学教室新館である。この二つの建物の隙間空間に初代プレハブが作られたのである。この写真をもとに地面を測ってみると、2 間 × 8 間の広さであったようだ。

プレハブの屋根はベニヤ板にトタンを張り付けたものであるから、夏の太陽が照り付けば部屋の中はとてつもなく暑くなる。そのためには部屋の広さには不釣り合いともいえる強力冷房機が必要であったのだろう。

1971 年度で大量留年生問題もある程度解決したのか、1972 年度からはこのプレハブ建物は修士学生のための部屋として用いられた。その 5 年後に修士学生となった重川氏もこのプレハブを修士控室として用いたそうである。

ドクターコース院生の控室は、新館 1 階にあった。

5.2.2 初代プレハブは何時まであったか これに関わる資料が見つければ正確な時期がわかるのは申すまでもないが、今はその資料が見つからないので、記憶を頼りにその時期を推察する。

松本氏の記憶では、1989 年 4 月に彼が龍谷大学へ異動した。その異動のときにはなお初代プレハブはあった。一方、重川氏の記憶では 1990 年位には新しいプレハブがあったように思われるとのこと。従って 1990 年位に 2 代目プレハブが建てられたと考えるのが自然のようである。

5.3 2 代目プレハブ

新館と工作室との隙間空間に押し込められたような一代目に比べて、2 代目は、写真から分かるように、中庭の中央に移された。写真を見ると、4 間 × 4.5 間 位の大きさであったかと思われる。

2 代目プレハブについては、私は少々記憶がある。屋根がヨシズで覆われていて、大棟（屋根面が合わさった一番高い部分）に水を流す穴の開いたパイプが設置されていた。



図 5.2 二代目プレハブ

初代のところでも触れたように、プレハブの屋根は合板にトタンを被せたような屋根材で出来ていたはずだから、夏の直射日光が降り注ぐと屋根材を通過して部屋に入ってくる熱さは如何許りであったか、想像を絶する感がある。それを防ぐためのヨシズと流水システムであったのだろう。ヨシズ一枚でどれほど日差しを遮ることが出来たか、また流水システムが稼働しているのを見たことがないことから推察すると、殆ど目に見える効果はなかったのかと推察する。

このプレハブが1990年ころから2006年位まで、修士課程の大学院生の控室であったのではないか。最近の日本は、度々災害にみまわれ、その度に被災者向けのプレハブ建設が報道される。報道では、夏の暑さが耐えがたいとの悩みが語られる。当時の修士大学院生はこれに類する悩みを経験したことであろう。

この2代目プレハブが篠崎さんの記事に出てくるプレハブである。

中庭に建てられたプレハブは初代および2代目のみであるが、それとは別に数学教室がプレハブをもう一つ持っていた時代があったとのことである。南ウイングの南側の空き地にあり、卓球台などが置かれていたそうである。

プレハブは大学変革期の一つの特徴であったような気がする。

6. どうでもよい話

京大百年史や七十年史を繰っていると、第三高等学校や京都大学が誘致される以前の事柄も述べられている。それらに触発されて、私が興味を覚えて想像を逞しくしたことを書いてみる。まさにどうでもよい話であり、確りとした根拠がある訳でもないから、無理して読んで下さるには及ばないものである。

6.1 吉田本町道標 本部構内の南西角、すなわち本部構内の東一条角に右の道標がある。その右側地面に“史跡 吉田本町道標”との説明板が埋め込まれている。道標は三つに割れているようで、鉄枠で崩れないように補強されている。時間経過による花崗岩の劣化の故か、あるいは自動車が突っ込んで折ってしまったのかは分からないが、相当古いだろうと思わせるものだ。

左側の面には“左 百まん扁ん”と書かれており、右側の面には“右 さかもと”“からさき”とならび、それらの下に“白川”の文字がみえる。すなわち右面に山中越え街道の行き先が書かれてあり、左面には百万遍に至ることが示されている。図1.1の絵図に当てはめて見ると、この道標は百万遍から南に下りてくる道と山中越え街道、滋賀越え道とも呼ばれる、の交差点にあったことが分かる。東一条交差点は、図1.1でお堂が描かれている場所となる。



図 6.1 吉田本町道標

6.2 本部構内の西側および北側の境界線

6.2.1 西側境界線 京都大学百年記念写真集に本部構内西側石垣の写真があり、この石垣は尾州屋敷時代の石垣ではないとしても、この石垣が示している境界線は尾州屋敷時代のものを示している、との説明がある。

京都大学本部構内の西側境界線は、現在は東大路の東側境界線でもある。私はこの境界線は、図 1.1 の絵図に描かれている、百万遍境内西側から南に下り、山中越え街道と交わり、山中越え街道を少々西にいき、現在の医学部北門辺りから南に曲がって聖護院や熊野神社に至った道路の一部であるに違いないと考えている。東一条交差点を南に越えてからの道は、医学部設置や第三高等学校の二本松町への移転によってこれらの敷地に入ってしまう、一般人が行き来する道路ではなくなった。そして勿論地図から消えてしまった。

図 1.2 を見ると、消えた昔の道路の代わりに、熊野神社から東一条まで真っ直ぐの道路が出現した。この道路は、地図を見るだけである時に人工的に通されたものと分かる。それに比べて、百万遍から東一条までの緩やかな曲がりをもった道路は、長年にわたる人々の営みから自然と作りだされたとの感じを与えてくれる。



図 6.2 東大路側境界線



図 6.3 今出川通り側境界線

6.2.2 北境界線 図 1.1、図 1.2 を見れば御所の裏を通り東に向けて直進して、鴨川を渡って銀閣寺道に至る現在の今出川通りは未だない。御所の北側から銀閣寺方面に行こうとすると、今出川通りを東に進む。すると伏見宮邸にぶち当たるので、そこを左に折れて、現在出町橋が架かっている辺りの橋で鴨川を渡し、いわゆる鴨川デルタを東に進み、ついで今の河合橋辺りにあった橋で高野川を渡って現在出町柳駅が出来ている場所に出る。図 1.2 に描かれた出町橋を越えて銀閣寺や浄土寺へ通じる道を勝手に**旧東今出川通り**と呼ぶことにする。

図 1.2 を見ると、旧東今出川通りは、吉田神社北参道入口の少しばかり西で山中越え街道と合流し、しばらく重なってから北参道入口を越えたところで、銀閣寺・浄土寺へ向かう街道と山中越え街道は分岐する（現在の今出川通りは、北参道入口を過ぎると銀閣寺道までは文字通り直線である。この部分は新しく敷かれたものであろう）。

図 1.2 と現在の地図を見比べると、百万遍交差点を越えての旧東今出川通りは、現今出川通りの南側歩道、すなわち本部構内北側境界そのものであると思われる。

昔の地図では旧東今出川通りと山中越え街道の合流地点は、現在“白川の石仏”が置かれている場所と見える。新しく今出川通りを作るに際して吉田山の張り出しを避けて旧道よりもだいぶ北側に作ったため、この旧街道合流地点を南西角とする（現在は家屋が建っている）三角区域が出来たのであろうか。それと同時にこの三角区域の西側にある、農学部進入路の現今出川通りを南側に越えたところのにある中途半端な広場が出現した理由も、上のようにでも考えないと理解しがたい。現在の今出川通り南側歩道はこの中途半端な広場で歩道は南に折れ曲がってから広い道路に戻っており、自

然さを欠いた造りである。旧東今出川通りの作り変えと拡幅工事で出来てしまった不自然さであろうか。

本部構内北側の少々の曲がりを含みながら、かつ道幅も一定でない歩道を歩んでみると、西側境界線と同様に昔の街道の面影を感じるのである。

6.3 北白川石仏

図 1.1 では、山中越え街道と、百万遍から熊野神社に至る街道の交差点にお堂の印がつけられている。他の古地図にも描かれていて、嘉永改正新選絵図（1852）にはお堂のうえに「ぢざう」の字が書かれている。この場所は先に述べたように、現在の東一条交差点であろう。絵図には必ずお堂の絵が描かれるほどによく知られた、また街道を行き来する人にとってとても大切な地藏堂が有ったのであろう。

昭和 33 年白川書院発行の「新撰京都名所絵会」に“北白川石仏”が紹介されている。著者の竹村俊則は以下のような説明を付している。



図 6.4 北白川石仏

北白川石仏は市電北白川停留所の南にある。厚肉彫の等身大の阿弥陀如来像二軀で、鎌倉中期以前の古い立派な石仏である。またその東北、電車道をへだてた北側にも一軀ある。いずれもむかしの山中越の街道筋に安置され、古くから庶民の信仰があった。かつてこの石仏を、秀吉が聚楽第へ移した際、夜な夜な白川へかえせと鳴動するので、やむなくもとの地へもとしたという伝説がある。

鎌倉中期以前から、街道を往き来する人達が旅の安全を祈願し、またお堂の陰で旅の疲れを癒したことを考えると、第三高等学校が出来、また京都大学となってゆくに際して、この石仏が打ち捨てられたとは考え難い。

山中越え街道で、東一条に次いで大切な場所と言え、山中越え街道と旧東今出川通りが出会う場所となるのではなかろうか。

図 6.4 の左端に大きな道標が映っている。嘉永年間と刻まれている。道標の各面には、南“三条大橋”、“祇園”、“知恩院”、“東西 本願寺”の文字が、また、東向きの案内として、“すぐ”と書かれた下に“比叡山”、“唐崎”、“坂本”の文字が、北面には“金閣寺”などの文字が刻まれて道案内をしている。

6.4 子安観音石像

山中越え街道が、現在の今出川通りを北側に渡る交差点の西北の場所に子安観世音の石像がある。この石仏を安置しているお堂の説明版には、この石仏は鎌倉期のもの

とある。よって鎌倉時代より、白川村の入口に当るこの場所にまつられてきたのである。お堂の別面には、天明7年制作の京名所絵図にこの石仏が載せられているとの説明があり、その絵図のコピーが展示されている。

如何にも歴史を感じさせる石像である。“白川女”が京の町に花や番茶を売りに出るとき、また帰るときにはこの観音像を拝んだと書かれている。

第三高等学校や京都大学が出来て、この周辺もすっかり変わったことであろうが、白川の石仏や、子安観音石像には京都大学の歴史をはるかに越える長い長い、移動手段がほとんど自分の足のみであった時代の人々の営みを伝える力があるように思う。

図版の出版と謝辞 用いさせていただいた図版の出典は以下の通りです。使用をお認め下さった諸機関に感謝の意を表します。なお、下記以外の図版は筆者が撮影したものです



図 6.5 子安観音石像

国際日本文化研究センター 所蔵文献センター

図 1.1 ID002863066

図 1.2 ID002813517

京都大学文書館 所蔵検索システム

図 3.1 002-00024

図 3.2 K-00506

図 4.2 372-00010

京都大学百年史総説編

図 1.3 (802 頁) 図 1.4 (804 頁) 図 1.5 (804 頁)

京都大学理学研究科数学教室図書室 所蔵写真

図 4.3 図 5.1 図 5.2

図 4.1 京大数学同窓会作成絵葉書 楠幸男名誉教授 “数学教室風景”